

研究論文

比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み — 「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める（Ⅱ） —

堀江 祐 爾

1 本論の目的

1.1 比べ読みによる教材研究

本論においては、比べ読みによる小学校国語科教材に関する教材研究についてある試みをおこなう。

本論は副題が示すように（Ⅰ）¹を受けての（Ⅱ）である。（Ⅰ）では、紙幅の都合により後に示す12の〈空所〉のうち7つしか扱うことができなかつたため、本論では残りの5つのうちの4つの〈空所〉についての考察をおこなう。そのため、一部の記述が重複することがある。

論文（Ⅰ）においても述べたように、教科書教材とその原作である作品を比べ読むことによって〈空所〉を埋めていくという教材研究としては、変則的な手法を用いる。変則的と言うのは、絵本をもとにした教材について、その原作（小説）が存在するという事はそれほど多くないためである（もちろん、小説が絵本になっている例は多くあるが、その絵本が「国語科教科書教材」になっている例は少ない）。教科書教材とほとんど同じ構成でありながら、その何倍もの長さをもつ原作と教科書教材とを読み比べることにより、通常であれば埋められることがない〈空所〉を埋めていく。これを「教材研究」と呼ぶことが妥当であるかどうか批判もあろうが、一つの試みとして以下、12の〈空所〉のうち残りの5つの中の4つに焦点を当て、〈空所〉についての考察を展開する。なお最後の〈空所〉を残す理由については後ほど述べる。

1.2 「比べ読み」について

船津啓治（2010:137）は「比べ読み」を次のように定義している（下線は論者が加えた。以下同様）。

比べて読むことは、複数の異なるテキストを対象とし、多面的、総合的に読む活動である。それぞれのテキストに共通する点に注目でき、内容や書き表し方がどう違うのかということにも目がいく。両者に使われている言葉は違っても照合してとらえたり、置き換えて考えたりすることができる。

船津啓治は、「比べ読み」を「複数の異なるテキストを対象とし、多面的、総合的に読む活動」と定義している。「活動」という用語が使われているように、ここでは学習活動が想定されている。学習活動においては、「両者に使われている言葉は違っても照合してとらえたり、置き換えて考えたりすることができる」のように、2つのテキストを「照合」したり、「置き換えたり」することをおこなう。本論ではあくまで「教材研究」としての「比べ読み」にとどめるため、〈空所〉を埋める作業としての「照

合」を詳細におこなう。

2 教材「海の命 (いのち)」と原作「一人の海」の関係

2.1 教材「海の命 (いのち)」と原作「一人の海」

論文 (I) において述べたように、教材「海の命 (いのち)」は平成 8 (1996) 年版より光村図書出版、東京書籍の 2 社の小学校国語教科書に採られてきている。令和 2 (2020) 年版小学校国語教科書において、光村図書出版では 6 年の 3 月単元に、東京書籍版では 6 年の 9～10 月単元に位置づけられている。なお、作品タイトルの表記は、光村図書版では「海の命」、東京書籍版では「海のいのち」となっている。

教材「海の命 (いのち)」は、平成 4 (1992) 年にポプラ社より刊行された絵本『海のいのち』(作・立松和平／絵・伊勢英子)を底本としている。その絵本『海のいのち』は、平成 3 (1991) 年 8 月に『Jump novel』vol.1 (集英社) 誌に発表された「一人の海」(作・立松和平／イラストレーション・岸大武郎^{きしだいむろう})をもとに作られたと推測される。「一人の海」は「海のいのち」と登場人物、展開がほとんど同じである。その後、「一人の海」は、平成 5 (1993) 年に集英社から JUMP J BOOKS の一冊として刊行された『海鳴星』(作・立松和平／イラストレーション・みのもけんじ^{うみなりぼし})という短編集に「海鳴星」、「一人の海」、「父の海」の海の三部作として収録されている。この『海鳴星』の「あとがき」において、「少年文学を復活させたいのです」という集英社の編集長と副編集長からの願いを受けて、立松和平は次のように述べている。

彼らの情熱やよしと思い、創刊されたジャンプノベルに、私はまず「一人の海」を書かせてもらったのであった。そこから海をテーマにする作品がはじまり、三作を仕上げることができたのだ。

少年文学を再生させようという彼らの願いへの、私のささやかなオマージュである。私は自分の読みたい作品を書いたのだ。そのことに対し、私は正直な気持ちになれる。

立松和平が「私は自分の読みたい作品を書いた」、「私は正直な気持ちになれる」と述べた作品群のひとつがこの「一人の海」である。

なお、教材「海の命 (いのち)」と『一人の海』との比較をおこなった先行研究については、論文 (I) において、昌子佳広 (2006) と、中野登志美 (2017) について触れたため、ここでは割愛する。

2.2 イーザーの「〈空所〉を読むこと」

国語科教育における読むことの学習指導および教材研究、中でも「読者論」に含まれる「読者反応理論」の基礎理論として、ドイツの文学研究者、英文学者であるヴォルフガング・イーザー (Wolfgang Iser 以下「イーザー」) の提唱する「〈空所 (blanks)〉を読むこと」が用いられることがある。

イーザー (1982:291) は、〈空所〉の補填に付随する機能について次のように述べている。

テキストはそのようにさまざまな組合せからなる一システムであるからには、組合せを具体化す

る読者のための場もシステム内に用意されているのが当然と考えられる。その場が空所であって、特定の省略の形をとってテキスト内の飛び地 (enclave) を作り出し、読者による占有をまつ。この空所の特色は、空所を作り出しているシステムそのものによっては充填されえず、他のシステムによる補填しかありえぬ点にある。そして補填がなされるとともに、構成活動が始まり、この空所という飛び地がテキストと読者の相互作用を推進する基本的な転換要素の働きを示す。従って、空所は読者の想像活動をひき起こすが、その活動はテキストの示す条件に従うように求められる。

〈空所〉とは、「『特定の省略の形をとってテキスト内の飛び地 (enclave) を作り出し、読者による占有をまつ』ものである」と定義される。そして、「この空所という飛び地がテキストと読者の相互作用を推進する基本的な転換要素の働きを示す」とあるように、〈空所〉を読むことによって、テキストと読者の相互作用が推進される。もちろん、〈空所〉の読みは「その活動はテキストの示す条件に従うように求められる」と、あくまでテキストにそったものでなければならない。

2.3 教材「海の命 (いのち)」に関する〈空所〉の読みに関する先行研究

教材「海の命 (いのち)」における〈空所〉の読みに関する先行研究については、論文 (I) において、松本修 (2018) の論考に触れたためここでは割愛する。

大江雅之 (2018) の論については、この論文 (II) においても重要な先行研究であるため、重複するが再度示す。大江雅之 (2018:3) は次のように述べて教材「海の命」に関する指導論を展開している。

どうして、教材『海の命』は指導が「難解」とされているのだろうか。

それは、教材『海の命』が「〈空所〉が多い」という作品理解上の課題を孕んでいるからである。

教材『海の命』は、絵本『海のいのち』を改稿して教科書に掲載された経緯をもつ。さらに、絵本『海のいのち』は、小説である原作『一人の海』から絵本化に向け大幅に内容が割愛されて誕生した経緯をもっている。つまり、教材『海の命』は、小説である原作『一人の海』から大幅に内容が割愛された絵本『海のいのち』を経て、教科書掲載のためにさらに絵が複数割愛されて誕生した文学的文章教材となるのである。よって、教材『海の命』は、叙述が少なく〈空所〉が多い特質をもっている。読者の想像で〈空所〉を補い、授業の学習課題とされてきた部分が、原作『一人の海』では、詳細な描写や語りによって明確に表現されているのである。

大江雅之 (2018) において、すでに授業実践に即しながら「海の命」と「一人の海」の比べ読みによる〈空所〉についての考察がおこなわれている。その意味では、本論の新規性、独創性は弱いかもしれないが、教材研究としての「海の命」と「一人の海」を詳細におこなうという意味において、先行研究を生かしながら、それをさらに「深化」するという意義を本論文は有する。

大江雅之 (2018:99) は、先行研究や実践をもとに、教材「海の命」の〈空所〉を表1のようにまとめている (囲み数字は本論論者が添えたものである)。なお、表中の「結合」とは、「テキストから選択された要素をテキストの理解ができるように組み立てることである。」

表1 「海の命」の主な〈空所〉 大江雅之 (2018:99) より

場面	〈空所〉の内容	〈空所〉になる理由・備考
一	①父の人物像がはっきりと描けない。	・父が「闘争本能」と「謙虚さ」という相反するエピソードで描かれていて混沌とする。
一	②父の死因がはっきりとしない。	・瀬の主との死闘なのか事故による死なのか分からない。
一	③太一の父の死への思いが見えない。	・太一の思いを見せないことで、クライマックスの行動への驚きや疑問を創り出している。
二	④与吉じいさへの弟子入りの理由が分からない。	・なぜ当時、漁法の異なる与吉じいさへ弟子入りしたのかが見えない。
二	⑤太一の修行の様子が見えない。	・「一人の海」には描かれている濃密な修行の時間が描かれていない。
四	⑥母の人物像と太一と母の関係性が見えない。	・母の描写があまりにも少なすぎて、登場人物として成り立っていない印象を受ける。
五	⑦太一の夢の内実が分からない。	・「一人の海」では明確になっている夢の内実が描かれていなく、三通りの学習者の反応が考えられる。 ²
五	⑧太一が「何のために瀬の主を探していたのか」が分からない。	・語り手が「夢」という表現をしたために、逆に太一が何をしたかったのかが判然としない。
五	⑨太一は「なぜ瀬の主を殺そうと思っていたのか」がはっきりとしない。	・「父のかたきを討つため」か「父を超えるため」なのか、結合が二項対立する。
五	⑩太一は「なぜ、瀬の主にもりを打たなかったのか」がはっきりとしない。	・最も重要な〈空所〉として、様々な結合の可能性をもっている。
六	⑪なぜ、瀬の主に出会ったことを「当然」誰にも話さなかったのかが分からない。	・「話せない内容」の捉え方によって四通りの学習者の反応が考えられる。 ³
題名	⑫「海の命」とは何なのかがはっきりとしない。	・題名の他に二箇所登場。第五場面の登場が矛盾しており、読者の想像力を喚起させている。

本論においては、「授業の学習課題とされてきた部分が、原作『一人の海』では、詳細な描写や語りによって明確に表現されている」ことに着目して、その〈空所〉を埋める。表1には12カ所の〈空所〉が示されている。論文(Ⅰ)においては、12カ所の〈空所〉のうち、①から⑦までの〈空所〉を扱った。論文(Ⅱ)である本論においては、12カ所の〈空所〉のうち、⑧から⑪までの〈空所〉を扱う。最後の〈空所〉⑫については、作品全体にかかわることであり、じっくりと考察する必要があるため、稿を改めてまとめることにした。

3. 「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める—空所8から空所11—

以下、「海の命」と「一人の海」の比べ読みをおこないながら、考察を加え、それにより空所8から空所11までの〈空所〉を埋める。なお、教材については光村図書(令和2年版)の「海の命」の本文を用いる。「一人の海」については、『海鳴星』に収録された「一人の海」を用いる。

「海の命」の叙述は実線で囲み、「一人の海」の叙述は破線で囲んで示す。抜き出した叙述が複数ある場合には、便宜的に『海の命』からのものには〈 〉を、『一人の海』からのものには《 》をつけた番号を添える。また、『一人の海』については〔pp.66-67〕のように引用箇所を頁数を示した。

3.1 [空所8] 太一が「何のために瀬の主を探していたのか」が分からない。

・語り手が「夢」という表現をしたために、逆に太一が何をしなかったのか判然としない。

論文（I）において考察した、〔空所7〕太一の夢の内実が分からない：「一人の海」では明確になっている夢の内実が描かれていなく、三通りの学習者の反応が考えられる〕と重なるところがある。「何のために瀬の主を探していたのか」に対応する叙述に焦点を当てる。

【海の命】〈1〉母が毎日見ている海は、いつしか太一にとっては自由な世界になっていた。

いつもの一本づりで二十びきのイサキをはやばやととった太一は、父が死んだ辺りの瀬に船を進めた。

いかりを下ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感触がこちよしよくい。海中に棒になって差しこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一は壮大な音楽を聞いているような気分になった。とうとう、父の海にやって来たのだ。

〈2〉追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。

太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。

海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいった。息を吸ってもどると、同じ所に同じ青い目がある。ひとみは黒いしんじゅのようだった。刃物のような歯が並んだ灰色のくちびるは、ふくらんでいて大きい。魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。岩そのものが魚のようだった。全体は見えないのだが、百五十キロはゆうにこえているだろう。

興奮していながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。

〈3〉この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

【海の命】では、〈1〉のように「父が死んだ辺りの瀬に船を進めた」と、ただの瀬ではなく「父の死んだ瀬にむかっていることが語られる。そして、「とうとう、父の海にやって来たのだ。」と目的地に着いたことが示される。さらに〈2〉においては、「追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。」と続くのであるが、確かにこの「夢」の内実がその前の叙述において明示されていない。太一はあのクエに出会う。ここで、「これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。」のように、このクエが「父を破った瀬の主かもしれない」と婉曲的な表現になっており、断定されてはいない。そして、瀬の主を仕留めるのが目的であるかのように描かれたところに、〈3〉のように、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれない」と、太一自身の問題へと転換される（これは〔空所9〕太一は「なぜ瀬の主を殺そうと思っていたのか」がはっきりとしないことと関係する）。このように、確かに読み手は、「太一が〔何のために瀬の主を探して

いたのか」が分からない。] 状態に置かれてしまうであろう。

【一人の海】《1》太一は秘^{ひそ}かな夢を育てていた。最初は妄想に近くて形もなさない夢であったが、太一が一人前の漁師として大きくなっていくにつれ、夢も具体的になってきた。父を殺したという瀬の主のクエを仕留めることだ。太一の村ではクエは人間を超える寿命があるとされていた。父を遭難させた時にすでに老成魚であったクエではあるが、父が打ち込んだ銚は潮に洗われる部分はすでに腐って消滅し、その他の部分はすでにクエの身体の内部に取り込まれているに違いない。傷を治したクエは、岩礁の底でじっと身をひそめて生きながらえているはずだった。太一はそのクエを仕留めるために漁師になったのだと、実際に海に潜るようになってから思うのであった。

太一の夢の中では、そのクエは体長二メートル、重さは百五十キロはあった。緑色の目で潮の流れを眺めつづけている。父と出会ったと同じ場所で、鬨って打ち破った男の息子がやってくるのを待っているのだ。そう夢想することで、太一には生きる力が湧^わいてきた。どんなにつらい仕事にも耐えることができたし、命が吸い込まれるような嵐と闘っても負けなかった。

あのクエと会いたい。そして、命を賭^かけた勝負をしたいのだ。そのために太一は給料の高い遠洋船にも乗り込まず、網の漁よりも釣りの漁よりも、潜り漁にこだわっていた。村にあれほどいた潜り漁師も、もう数えるほどになっていた。潮流の激しい太助瀬にはあまりでかけていこうとしないために、クエも、アワビやサザエも、数が増えたはずであった。[pp.66-67]

《2》「おっ母は、お前がお父の瀬に潜るといついいたすかと思うと、恐ろしゅうて夜も寝られん。お前の顔にはそげん言葉が書かれちよる」

太一は母と何度同じ会話を交わしたことだろうか。自分を思ってくれる母の気持ち^{うれ}が嬉しくないはずはないのだが、太一としてもここまでつちかかってきた信念を曲げる気はなかった。太一は嵐さえも跳ね返す屈強な若者になっていたのだ。その逞^{たくま}しい背中に、太一は母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

機が熟したからには、すぐさま実行に移す必要がある。さっそく太一は潜水の道具を揃えた。父の残してくれた道具を使おうという気もないわけではなかったのだが、それよりもよいものができていたのだ。漁業協同組合の売店にいけばほとんどのものが揃う。なければよその町からすぐに取り寄せることができた。潜り漁師は老人が多かったので、組合の職員に太一は珍しがられた。

「遊びよ。アワビをちいと食いたいと思うてな」

質問されると太一は笑ってこう応えた。父を殺したクエを獲ろうとすることは、生活をするということから見れば遊びには違いなかった。遊びにも命は賭けられる。[pp.90-91]

《3》はち切れそうにふくらんだ網袋を船に投げると、今度は太一は銚だけを持って潜った。海中に棒になって射し込んだ光が、波の動きにつれ輝きながら交差する。水中では耳を圧迫するじーっという音しか聞こえなかったが、太一は壮大な音楽^{そうだい}を聞いているような気分になった。とうとう父の海にやってきたのである。しかも、ここは太一一人の海なのだ。しばらくの間太一は重力をなくして水中に浮かんでいた。

この瀬には必ず何匹かクエが棲すんでいるのだ。クエは大きな黒い目と強い顎あごを持ち、何もかも呑み込んで身体を太らせていく。父との闘いに勝ったクエがまだ生きていのかどうか、誰にもわからなかった。だが太一は信じたい。波の動きが太助瀬の主のクエの呼吸のように思えてくる。クエは太助瀬の奥の穴に身を隠して、夜にならなければでてこないのかもしれない。クエのすぐそばに自分が潜っているのだと思うと、太一は嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。〔p.96〕

《4》追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。最初のクエを仕留めてからちょうど一ヶ月たち、潜るにもそろそろ水も冷たくなってきた頃であった。

海の中は季節の移ろいを濃く映す。抜けて流れ藻になり回遊魚たちに産卵の場を提供したホンダワラが、岩の上からまた新しい芽を伸ばしてきた。同時にそれまで色鮮やかだった海草が枯れはじめている。丸々と太った大きなブリの姿もちらほらと目につくようになっていた。餌い付け漁をしていても海の中の変化はうかがい知れるのだが、潜水をすればそれを実際に見ることができる。

いつもの通りいつもの場所に銚しやうを持って潜った太一は、雰囲気がいつもととは微妙に違うことを感じた。それを季節の移ろいのせいだと思ったのである。ウニもアワビもサザエも網袋に一杯獲るのは太一にはわけもないことだったから、素潜りを楽しむようになっていた。だがそれまで磨きに磨いてきた五感と第六感とが、太一に名状めいじやうしがたい感覚を伝えていた。

銚の刃先をたえず顔の前にだすようにして潜った。時折ブリの群が高速列車のように海水を泳いでいく。もちろん音は聞こえなかったのだが、轟音ごうおんを立てて空を飛び去っていくようにも見えた。

緊張を感じてはいたにせよ、それまでの生涯を賭けた瞬間に、太一はあっけなく立ち至ってしまったのだ。太一は海草の揺れる岩の穴の奥からこちらをうかがっている視線を感じたのである。そろそろ潜水してられる限界に近づいていたのだが、水中眼鏡の奥から太一も強い視線を返した。親しい友としばらくぶりで会ったような親密さを、太一は覚えた。そこには緑色に光る宝石の目があったのだ。〔pp.101-103〕

《5》父が見た魚を、自分もまた見ているのだ。興奮していながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきた幻の魚、村一番の潜り漁師だった父を殺した瀬の主かもしれない。〔p.103〕

【一人の海】においては、《1》のように「太一は秘かな夢を育てていた。最初は妄想に近くて形もなさない夢であったが、太一が一人前の漁師として大きくなっていくにつれ、夢も具体的になってきた。父を殺したという瀬の主のクエを仕留めることだ。」と、太一が抱く「夢」が「父を殺したという瀬の主のクエを仕留めること」であることが早くから明示されている。さらに、「太一はそのクエを仕留めるために漁師になった」とたまたみかける。「太一の夢の中では……闘って打ち破った男の息子がやってくるのを待っている」、そして「そう夢想することで、太一には生きる力が湧いてきた。」と、太一の「夢想」かもしれないという可能性を残しているが、「そう夢想することで、太一には生きる力が湧いてきた。どんなにつらい仕事にも耐えることができたし、命が吸い込まれるような嵐と闘っても負けなかった。」と夢想が現実の生活につながっていることが描かれる。《2》においては、「お母」の「お前がお父の瀬に潜るといついいたすかと思うと、恐ろしゅうて夜も寝られん。お前の顔に

はそげん言葉が書かれちよる」という言葉が示される。それでも、「自分を思ってくれる母の気持ちが嬉しくないはずはないのだが、太一としてもここまでつちかってきた信念を曲げる気はなかった。」と、太一の信念の強さが描かれる。そして、「機が熟したからには、すぐさま実行に移す必要がある。」と、太一はいよいよクエ獲りに挑む。「父を殺したクエを獲ろうとすることは、生活をするということから見れば遊びには違いなかった。遊びにも命は賭けられる。」と、クエ獲りという、生活に直結することと相反する「父を殺したクエを獲ろうとすること」が「遊びには違いなかった」と自虐的な視点からも自らの行為を見つめている。《3》では、「とうとう父の海にやってきたのである。しかも、ここは太一一人の海なのだ。」と、父の潜っていた瀬に潜ることになり、「しかも、ここは太一一人の海なのだ。」と【一人の海】の題名の意味が示唆される。そして、「父との闘いに勝ったクエがまだ生きていますかどうか、誰にもわからなかった。だが太一は信じたい。……太一は嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。」と、父がクエと闘った瀬ようやく来ることができたうれしさを表している。こうした「夢」が語られた後《4》では、「追い求めているうちに、いきなり夢は実現するものだ。」ということが述べられる。【海の命】では唐突にこの叙述が出てくるが、【一人の海】においてはこれだけの段階を踏んだ上で、この叙述が示されることによって、決してここが〈空所〉とはなっていない。そして、「緊張を感じてはいたにせよ、それまでの生涯を賭けた瞬間に、太一はあっけなく立ち至ってしまったのだ。」という状況について説明される。さらに、さらに、「そこには緑色に光る宝石の目があったのだ。」と、あのクエに会うことができたということが暗示される。《5》においては、「父が見た魚を、自分もまた見ているのだ。」と、そのクエが父が対峙したクエであることが明示される。そして、「これが自分の追い求めてきた幻の魚、村一番の潜り漁師だった父を殺した瀬の主かもしれない。」と、まだ断定はできないまでも、「父を殺した瀬の主」であろうことが示される。

3.2 空所 9 太一は「なぜ瀬の主を殺そうと思っていたのか」がはっきりとしない

・「父のかたきを討つため」か「父を超えるため」なのか、結合が二項対立する。

【海の命】 この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

【海の命】においては、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれない」という因果関係のみが示される。そして、「太一は泣きそうになりながら思う」と感情的になっている様子が描写されるが、その内実は〈空所〉のままである。

【一人の海】 《1》太一はあるクエを仕留めた時が、^{すなわ}即ち自分が漁師として一人前になる時なのだと思いを定めていた。その時こそ、父のようにこの海で生きることができるのだ。^{かたく}頑なにそう思い込むほどに、太一は父を殺したクエのことを幼い頃より考えつづけてきたのである。〔p.81〕

《2》大きな楽しみができた。餌付け漁がすむと、太一は船の上で潮が引くのを待った。太一は海に弁当を持っていくようになっていた。母のつくってくれた弁当を食べながら海を見ていると、太一は遠いところに行ってしまった父とすぐ間近で話しているような気になった。

「よか漁師になったねえ。よか若い衆じゃねえ」

潮騒しおさいとともに父の声が聞こえてきた。太一は笑顔を海に向けるのだ。

「お父の海にようやくきましたばい」

「わしの海じゃなかよ。お前の海よ」

「おっ母もやっとな文句もいわずに弁当ばつくってくれるようになったとね」

「お前を一人前の男と認めたよ」

「まだまだ一人前じゃなか。クエば一匹も獲っとらん」

「それなら獲らしてあげようかいねえ。釣ば持って飛び込まんね」

こんなとりとめもない会話を父と交わした気分になった後、太一は船上で支度を整えてから海中に飛び込んだ。〔pp.97-98〕

《3》とうとう太一はクエを見つけた。岩陰の穴の中で分厚い唇をこちらに向けている。肌は淡い黄褐色である。太一が近づいていっても逃げようとしない。かまわず太一は鼻先めがけて釣を打ち込んだ。父が獲らしてくれるクエなのだからかまわないという気持ちがあったのだ。電気が走ったような衝撃を感じて太一は手を離してしまった。伸びようとするロープを引っ張り、そばの岩に巻きつけて固定した。岩の穴から血の色がひろがってくるのを見ながら、太一は呼吸をするため急いで水面に上がった。〔p.99〕

《4》もちろん太一が仕留めたのは父を殺したクエではない。あんなものではないのである。だが大物といえるクエを仕留めたことで、むしろ太一には虚しさむなが突き上げていた。村の連中のようにはあのくらのクエではとても喜べないのである。〔p.101〕

《1》では、「太一はあのクエを仕留めた時が、即ち自分が漁師として一人前になる時なのだと思います」と太一の思いが示される。つまり、あのクエを殺すことが目的ではなく、自分が「漁師として一人前」になることが目的であることが明示されている。「その時こそ、父のようにこの海で生きることができる」というように、この目的はあくまで父との関係の上で成立するものであり、一時的なものではなく、「頑なにそう思い込むほどに、太一は父を殺したクエのことを幼い頃より考えつづけてきた」とあるように、長い年月を経てきた目的なのである。《2》では、「太一は遠いところに行ってしまった父とすぐ間近で話しているような気になった。」「潮騒とともに父の声が聞こえてきた。太一は笑顔を海に向けるのだ。」のように、このことが父との関係の上で成立するものであることを示し続ける。さらに「お父の海にようやくきましたばい」／「わしの海じゃなかよ。お前の海よ」／「おっ母もやっとな文句もいわずに弁当ばつくってくれるようになったとね」／「お前を一人前の男と認めたよ」／「まだまだ一人前じゃなか。クエば一匹も獲っとらん」と、父—母—太一の絆の強さが強調される。《3》においては、「父が獲らしてくれるクエなのだからかまわないという気

持ちがあったのだ。」と、自分がクエを獲る際においても、「父が獲らしてくれる」と考えている。さらに、《4》では、「太一が仕留めたのは父を殺したクエではない。あんなものではない」と、自分が仕留めたクエについて否定的に捉えている。ここには父の呪縛から逃れられない太一の姿が垣間見える。これについては [空所 10] に関する考察において扱う。

3.3 [空所 10] 太一は「なぜ、瀬の主にもりを打たなかったのか」がはっきりとしない。

・ 重要な〈空所〉として、様々な結合の可能性をもっている。

【海の命】 興奮していながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。太一は鼻づらに向かってもりをつき出すのだが、クエは動こうとはしない。そうしたままで時間が過ぎた。太一は永遠にここにいられるような気さえた。しかし、息が苦しくなって、またうかんでいく。

もう一度もどってきても、瀬の主は全く動こうとはせずに太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと、太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは、初めてだ。この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にどけ、クエに向かってもう一度えがおを作った。

「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。

「興奮していながら、太一は冷静だった。」という状態であり、おじけづいたのでも、思い違いをしたのでもない。「これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。」と父と瀬の主との関係が述べられる。ところが、後に述べる【一人の海】において、息をし直してもう一度もどってくる前に語られる瀬の主への「殺意」がないことについての叙述が省略されてしまっている。それを押さえないければ、「この大魚は自分に殺されたがっているのだと、太一は思ったほどだった。」の意味が曖昧なままになってしまう。この叙述は「殺意」を持たない自分への言い聞かせではないだろうか。そして、「これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは、初めてだ。」の後に、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。」という【一人の海】にはない記述が置かれ、「本当の一人前の漁師」になるという太一の夢が提示される。瀬の主を殺さなければ「本当の一人前の漁師」にはなれないということを強調したあと、「泣きそうにな」った太一が「ふっとほほえみ」「もう一度えがおを作った」様子が描かれる。そして、「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」という思いが語られる。そして、「こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないで済んだのだ。大魚はこの海の命だと思えた。」と続く。瀬の主を殺さなければ「本当の一人前の漁師」にはなれないはずの太一が、なぜ急に瀬の主を殺さないという決断をしたのであろうか。このようにまさに、〔なぜ、瀬の主にもりを打たなかったのか〕という〈空所〉が存在する。

【一人の海】 父が見た魚を、自分もまた見ているのだ。興奮していながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきた幻の魚、村一番の潜り漁師だった父を殺した瀬の主かもしれない。たぶんそうに違いない。太一は鼻先に向かって鉦を突き出すのだが、クエは動こうとしない。かつて自分が殺した漁師の息子にその身を捧げようとでもしているのかもしれない。魚の目に見られているうちに、太一は自分が殺意もなく静かな気持ちでいることに気づいた。魚はまるで太一の心の底までのぞいているかのようである。殺意ははじめからなかったのか、それとも魚の視線によって溶かされてしまったのか、すでに太一にはわからなかった。そうしたままで時間が過ぎた。太一は永遠にここにいられるような気さえしてきた。しかし、息が苦しくなってまた浮かんでいく。

もう一度戻ってきても、瀬の主はまったく動こうとせずに太一を見ていた。穏やかな目だった。もし言葉が交わせるのなら、太一はこの魚に問うてみたいことがたくさんある。クエは瞳を固定して太一を見ていた。あまりの無防備さに、この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。太一はこれまで数えるのも不可能なほどの数の魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのははじめてだ。この魚を獲らなければ本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうな気分になりながら思う。激精が去ると、静かな気持ちになった。

水の中で太一はふっと微笑み、口から銀のあぶくをだした。鉦の刃先を足のほうにどけ、魚に向かってもう一度笑顔をつくった。

「お父、ここにおられたとですか。また会いにきますばい」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。大きなクエはこの海の命だと思えた。

父の海だった。〔pp.103-108〕

【海の命】には載せられていない叙述に下線を添えた。「父が見た魚を、自分もまた見ているのだ。」という叙述が「興奮していながら、太一は冷静だった。」の前にある。太一の後ろには父が存在する。だからこそ、「興奮」と「冷静」とが共存しているのであろう。「村一番の潜り漁師だった父を殺した瀬の主かもしれない。」の後に、「たぶんそうに違いない。」が続く。太一が自分に言い聞かせて念押しをしているのである。「かつて自分が殺した漁師の息子にその身を捧げようとでもしているのかもしれない。」この瀬の主に関する叙述が【海の命】にはない。さらに、「魚の目に見られているうちに、太一は自分が殺意もなく静かな気持ちでいることに気づいた。」と、すでに「殺意」がない状態であることが明示される。「魚はまるで太一の心の底までのぞいているかのようである。」瀬の主と対峙している太一は「心の底まで」のぞかれているように思うのであるが、実は太一自身が自分の心をのぞいているのである。そして、「殺意ははじめからなかったのか、それとも魚の視線によって溶かされてしまったのか、すでに太一にはわからなかった。」と、もう一度「殺意」についての記述が提示される。「殺意ははじめからなかった」のか、それとも「魚の視線によって溶かされてしまったのか」さえ、「すでに太一にはわからなかった」という状態になっている。つまり、この段階において、太一は瀬の主を殺さないことを決めていると考えるのが妥当であろう。「もし言葉が交わせるのなら、

太一はこの魚に問うてみたいことがたくさんある。」と、太一自身が瀬の主に進み寄り、交流をしたいとさえ思っている。「クエは瞳を固定して太一を見ていた。あまりの無防備さに、」の後に、「この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。」が続く。「無防備に」「太一を見ていた」からこそ、もしかしたら「自分に殺されたがっている」という思いが湧く。「殺意」を捨て去っている太一であるが、もし瀬の主が「自分に殺されたがっている」のならば殺してやろうかという思いであろう。「太一はこれまで数えるのも不可能なほどの数の魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのははじめてだ。」の「こんな感情」というのは、「殺意」はないが、「殺されたがっている」から殺すという複雑な思いのことではないだろうか。そして、「この魚を獲らなければ本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうな気分になりながら思う。」と、瀬の主を殺すことと「本当の一人前の漁師に」なることとの関係が出される。ここで注目したいのは、「泣きそうな気分になりながら」である。「殺意」がないのに、殺すという矛盾におち当たり「泣きそうな気分」になっているのではないだろうか。【海の命】にはなく、【一人の海】にある、重要な叙述が「激情が去ると、静かな気持ちになった。」であろう。父を死に追いやった瀬の主を殺さなければならぬという「激情」から、ここにおいて解放され、「静かな気持ちになった」と言えよう。太一の元来の思いであった「瀬の主を殺さない」ということを貫きとおしたのである。「激情」から解放された太一は、「ふっと微笑み」「笑顔をつく」り、本来の姿に戻った。そして、「お父、ここにおられたとですか。また会いにきますばい」と、瀬の主の心の中で語りかける。「こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。」の「こう思うことによって」は、上に述べたように自分の心の中の矛盾を乗り越え、本来の思いに立ち返ったことを指している。だからこそ、「大きなクエはこの海の命だと思えた。」と、太一もクエも共に生きる海であることを示す叙述が続く。【一人の海】では、「父の海だった。」が加えられている。父が帰っていった海。瀬の主も、そして太一もやがて帰っていく海である。いわゆる「父親殺し(エディプスコンプレックス)」について触れておく必要がある。石原千秋(2005:102-104)は「自らの死によって『自然は偉大だ』と教える父を乗り越えることで『成長』する、父親殺しの物語である。」と述べ、さらに、「この父は『水の神』であるクエを殺そうとする人間だったのである。しかし、息子の太一はそうしなかった。『自然』に従ったのだ。それは、『自然』に対して父とは異なった思想を持ったことになる。クエを殺さなかった時、息子は父を象徴的に殺していたのである。」と「父親殺し」という観点から、クエを殺さなかった理由について論じている。この「父親殺し」については稿を改めて考察したい。

3.4 空所 11 なぜ、瀬の主に出会ったことを「当然」誰にも話さなかったのかが分からない

・「話せない内容」の捉え方によって四通りの学習者の反応が考えられる。

【海の命】 やがて、太一は村のむすめとけっこんし、子どもを四人育てた。男と女と二人ずつで、みんな元気でやさしい子どもたちだった。母は、おだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになった。

太一は村一番の漁師であり続けた。千びきに一びきしかとらないのだから、海の命は全く変わらない。巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生涯だれにも話さなかった。

瀬の主との対峙したクライマックスの後、結末部に向かう。「やがて、太一は村のむすめとけっこんし、子どもを四人育てた。男と女と二人ずつで、みんな元気でやさしい子どもたちだった。」と描かれる。これは父母から子へとつながる「世代間継承」が形成されたことを示している。「母は、おだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになった」と、一世代上の母が登場することによって、この「世代間継承」が強調される。「太一は村一番の漁師であり続けた。」太一の世代においては、「村一番の漁師」であることが示される。「千びきに一びきしかとらないのだから、海の命は全く変わらない。」は、単なる客観的状況説明ではなく、だから次の世代にも「海の命」を引き継ぐことができるというメッセージが隠されている。「巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、もちろん太一は生涯だれにも話さなかった。」については、瀬の主との対峙・対決はあくまで太一ひとり（または父親との関係）の物語である。こう捉えると、「生涯だれにも話さなかった」ことに違和感はない。「世代間継承」により「悠久性」を示唆したまま終えるよりも、最後にもう一度、太一の物語に戻すという効果があると言えるであろう。

【一人の海】 やがて太一は村の娘と結婚し、子供を四人つくった。男と女と二人ずつで、どれも元気な子供たちだった。母は穏やかで満ち足りた美しいお婆さんになった。太一は世間から見れば貧乏だったのかもしれないが、不足というものを感じなかった。

太一は村一番の漁師でありつづけた。たとえ村で一人になっても、太一は漁師をやめないだろう。瀬にはアワビもサザエもウニも重なりあうほどにいたし、季節によって種類の変わる魚はぶつかるほどに泳いでいた。太一は千匹に一匹しか獲らないのだから、海の命はまったく減らない。

巨大なクエを岩の穴で見かけたのに鉈を打たなかったことは、もちろん太一は生涯誰にも話さなかった。[p.108]

【一人の海】 だけにある叙述に下線を添えた。「太一は世間から見れば貧乏だったのかもしれないが、不足というものを感じなかった。」これは、「千匹に一匹しか獲らないのだから、海の命はまったく減らない。」という叙述と対になっている。大量に魚を獲り、売りさばいて金をもうける漁師ではなく、必要最低限の魚を獲って暮らす。当然、「貧乏」な暮らしぶりになる。ここにも、与吉じいさ、父、という前の世代から受け継ぐという「世代間継承」が描かれている。「魚はまったく減らない。」ではなく、「海の命はまったく減らない。」と「海の命」という表現を使い、題名が示すテーマと関連させている効果も見逃せない。

*

以上、大江雅之（2018）の示した12カ所の〈空所〉のうち、⑦から⑩までの〈空所〉を埋める作業をおこなってきた。最後の「空所12海の命」とは何なのかがはっきりとしないについては教材「海の命」の全体に関わるものであるため、稿を改めて考察したい。

4. 結語

山元隆春（2005:161）は、〈空所〉について横光利一の短編小説『蠅』の会話文でのやり取りにおける〈間〉を例に、次のように論じている。

こういった〈間〉のことを、イーザーは〈空所 (blanks)〉と名づけている。〈文学テキスト〉を〈文学作品〉として成立させていくためには、読者がそういった〈間〉に自らの想像力で橋渡しをしていかなければならない。〈テキスト〉においては、こういった〈間〉が、ある意図を持って配置されており、それが読者の〈一貫性〉形成を妨げたり、そのことによって逆に〈一貫性〉形成へと向かう読者の意思を強化していったりする。こういった〈間〉の配置は〈テキスト〉の〈ストラテジー (strategies)〉の一つであり、これによって、〈テキスト〉は読者が〈作品〉を成立させるための手助けをする。

このように山元隆春は、テキストには〈間〉、つまり〈空所〉がある意図を持って配置されており、あるテキストを文学作品たらしめるには、読者が〈間〉に対して想像力によって橋渡し、つまり埋めていく作業をしなければならないことを指摘している。

今回、大江雅之 (2018) において提示された 12 カ所の〈空所〉のうち、[7]から[11]までの 5 つ〈空所〉を埋める試みを丹念におこなった。もちろん、教材研究は授業のためにおこなうものである。本論の成果を実際の授業においてどのように使うかはそれぞれの教師自身の判断に委ねられている。本論での考察が、教材「海の命」の授業実践をさらに豊かにすることに役立つことを願っている。

最後に大江雅之 (2018) の授業実践に即した「一人の海」との比べ読みをおこなった論考と 12 の〈空所〉の提示に対して感謝したい。

〈注〉

- 1 『神戸女子大学文学部紀要』56 巻 (2022) に掲載された「比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み—「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める (I) —」は、神戸女子大学図書館のリポジトリから pdf ファイルの形でダウンロードすることができる。
- 2 「三通りの学習者の反応」とは次の 3 つである。○「夢」の内実の一つ目として、原作通りに瀬の主に「父のかたきを討つこと」であると捉える結合が生まれる。○「夢」の内実の二つ目として、「瀬の主に会うこと」であると捉える結合が成立する。○「夢」の内実の三つ目は、「父と一緒に海に出ること」と捉える結合である。大江雅之 (2018:73-74) より。
- 3 「四通りの学習者の反応」とは次の 4 つである。○一つは、「もりを打たなかったこと」を話せない内容だと捉える結合である。○二つは、「巨大なクエを岩の穴で見かけたこと」を話せない内容だと捉える結合である。○三つは、「巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかった」出来事そのものを話せない内容だと捉える結合である。○最後は、「巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかった」出来事そのものについて「話す必要のない」内容だと捉える結合である。大江雅之 (2018:78) より。

〈引用・参考文献〉

石原千秋（2005）『国語教科書の思想』筑摩書房

ヴォルフガング・イーザー（1982）『行為としての読書—美的作用の理論』饗田収訳 岩波書店

大江雅之（2018）「立松和平『海の命』指導論—空所を読む力をつけるために—」弘前大学院教育研究科 修士論文

https://hirosaki.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=5697&item_no=1&attribute_id=20&file_no=1 より入手可能（最終確認 2022 年 11 月 25 日）

佐藤佐敏（2017）「身体反応に基づく「海のいのち」の教材論—遡及的推論と叙述の響き合い—」『人間発達文化学類論集』第 25 号 pp.21-29

昌子佳広（2005）「教材『海の命（いのち）』論（1）—原典（絵本）『海のいのち』との比較をもとに—」『国語教育論叢』14 島根大学教育学部国文学会 pp.211-222

昌子佳広（2006）「教材『海の命（いのち）』論（2）—立松和平『一人の海』との比較をもとに—」『国語教育論叢』15 島根大学教育学部国文学会 pp.27-39

高橋正人（2018）『海のいのち』における時間構造と海の意味に関する考察—重層的な時間と母の子宮をめぐる—『人間発達文化学類論集』第 27 号 pp.39-54

中野登志美（2017）「立松和平「海の命」の教材性の検討—絵本『海のいのち』と『一人の海』を視野に入れた読みの構築—」『論叢国語教育学』第 13 号 広島大学国語文化教育学講座 pp.27-35

松本修（2018）「埋められない空所—「海の命」の語りと読み—」『国語科学習デザイン』第 2 巻第 1 号 国語科学習デザイン学会 pp.42-51

船津啓治（2010）『比べ読みの可能性とその方法』溪水社

細恵子（2021）「U 理論を用いた文学教材「海のいのち」の授業構想—小学校 6 年児童の実態調査を踏まえて—」『初等教育カリキュラム研究』第 9 号 pp.21-33

山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築—読者反応を核としたリテラシー実践に向けて—』溪水社